

書評

河野 茂, 早田 宏 編

レジデントのための呼吸器診療マニュアル

東京女子医科大学教授/東京女子医科大学病院長・呼吸器内科

永 井 厚 志

このたび、医学書院から『レジデントのための呼吸器診療マニュアル』が上梓された。本書は大変ユニークな日常診療への実践書である。冒頭に編者は、“医学は再び長崎から”と付言し、本書の作成に当たる意気込みを吐露している。その思いは、ポンペ・ファン・メールデルフォートがわが国の西洋近代医学教育として長崎医学伝習所(現長崎大学医学部)で患者中心の臨床教育を最初に行った史実にあったであろう。

これまでも多くのマニュアルやハンドブックが作成されてきた。その構成は、症候や疾患を網羅的に取り扱い、整然とした記載内容はミニ成書の類であった。しかし、本書は大きく異なっている。まず第1章「疾患・症状のマネジメント」で目にするのは、“〇〇の疾患に出あったとき”や“〇〇症状をみたら”といった日常的に交わされる指導医とレジデントの会話が項目になっていることである。

項の始めは“直伝極意”と銘打った、しっかりと覚えていなければならないポイントである。続けて診療のフローチャートが描かれ診断から治療までの流れが一見

して理解できるように作成されている。このように疾患や病態への基本を踏まえたところで、医療面接と診察のポイントとしてチェック項目を掲げながら端的明瞭な解説を加えている。この解説も饒舌に走らず、1~2行で説明をしているので自然にキーワードとして頭の中に入るよう仕組まれている。

最後に診療に役立つ豆知識として「Mini Lecture」が載っている。これがなかなか見逃せない内容となっている。例えば、伝染性単核症では全身性の皮疹が必発するため、ペニシリン系薬剤を使用してはならないと明記されている。このことを知っていても、風邪様症状の患者にはこれらの薬剤を使用しがちであり、改めてはっとさせられるに違いない。

第2章は「チーム医療のために」として呼吸器疾患の診療と密接に関わる循環器の問題を取り上げている。これまでも肺と心臓は病態や治療面で総合的に取り扱う必要性が指摘されてきた。しかし、このように呼吸器疾患における循環器病態の管理を正面切って扱った書はまれである。

第3章は基本検査について解説

されている。ここでは、図表を多用することにより一目見ることができ、検査結果を理解することが可能となるように工夫されている。この章でも“直伝極意”は面白い。気管支鏡検査のポイントでは「人は、『リラックスしろ』といわれてできるものではない」、そのとおりと思わずうなずくに違いない。このような患者の視点に立った医療行為が重要であることを随所に、さりげなく挿入しているのが本書の特徴のひとつでもある。

第4章は「治療総論」として最新の治療情報を漏れることなく紹介している。

最終章の第5章では「臨床に役立つエッセンス」として、診療記録の記載、インフォームド・コンセント、コミュニケーション、医療事故への対応など日々の診療で心掛けておかなければならないことや、いつか遭遇する問題への対応などについて記載されている。この章には第1項と最終項に“患者中心の医療”と“こころある医療を求めて”を取り上げている。本書に一貫してみられる医療の実践に際して心すべき基本がここに集約されている。まさにポンペの教えであり、医育発祥の地、長崎から発信された本書の根幹である。「レジデントのために」とされているが、医療に携わる多くの方々に優れた実践の書として本書をお勧めする次第である。

〔A5 頁400 2008年 定価
4,935円(本体4,700円+税5%) 医学書院刊〕

* * *